
凡人凡夫の異世界探訪

キリンが逆立ちしたピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人凡夫の異世界探訪

【Nコード】

N6079G

【作者名】

キリンが逆立ちしたピアス

【あらすじ】

突然放り出された異世界。元の世界では、考え方と運のなさ以外きわめて凡庸だった彼はどう生き延びるのだろうか思いついたまま書きつづります。

01・1111はギョウマ？

さて、ここはどこ？ 私は誰？

目を開けた彼は、自然とその言葉を口にしていた。

「いやいや、僕の名前は一色章。高校二年の十七歳だから」

自他共に認める凡人な顔。

一般的な高校の、一般的な成績の学生である。

体力は一応鍛えてるから、そこそこだと思う。

趣味はパソコン。

授業では、生物、国語、英語が好き。

木漏れ日が気持ちいい春の陽気には似合わない、自己紹介のような確認。そよ風の中に混ざっている羽虫を払いながら、そうして冷静さを取り戻していく。

「いや、一般的な高校でもないか……」

自分の言葉の間違いに気付くほど落ち着くと、目を瞑って、迷子になったときの決まりを思い出した。

「迷子になったら、元来た道を……」

振り向いて、頭を振る。

そこには、一つの木が大きく倒れ、日溜まりになっている。倒れた木の前まで歩き、それに腰掛けて一つ頷く。

「だから、ここはどこたあーっ！っ！！！！」

太陽を目指して一生懸命伸びている植物を指さし、全力で突っ込ん

だ。

四方三百六十度を囲んでいる木々に吸い込まれて、真人の主張は霧散してしまう。

そして、大声を出したことで今度こそ落ち着いた真人は声に出して、状況の整理を始めた。

「考えられるパターンは五つ。超能力説、SF説、脳障害説、夢説、魔法説かな」

レポートや、タイムトラベルなんかで飛んだのかも。

もしかしたら、ワームホールみたいな物があったかものしれない。

他にも、視覚やら嗅覚なんか全部おかしくなって、周りには普通に人がいるのかも。

夢だったり、魔法が存在してたりするのかもしれない。

「ま、夢の可能性が高いけど……危険性が一番高いのは、異世界だとか想定できない場所だよな」

そう言って、鞆の中を調べ始める。

この場でもっとも大切なこと。

状況を疑うことも一つだが、その状況に対応する術を考えることである。

そんなことを落ち着いて考えられるほどには、常識を崩して考えられる人間だった。

まずは持ち物の確認、メモ帳と筆箱。制汗スプレーとライター。
最後に、ハードカバーが一冊と、その本を書ったときのビニール袋

「たぶん、本を買った帰りに何かが起きたんだろうなあ」
筆箱から、ペンとカッターを取り出す。

ペンとメモ帳を胸の、カッターをズボンの右に差し込んだ。

「威嚇くらいにはなるよな」

ライターを左に、制汗スプレーとそこら辺に転がっている石を袋に入れる。

「まずは、言葉を覚えないとなあ。たとえばここが地球でも、日本に帰れないと……」

世界地図を思い出し、どこにいるのか予想を立てることにした。

「見たところ、関東よりは北か、それと真逆の半球かな？」
常緑の感じがする針葉樹を見上げて呟く。

「こういう時には、雑学がありがたいな。さらに仕入れておくべきだった」

倒れた木の切り株を見て、辛うじて方角を読みとる。

「人が住むなら、南かな」
とか予想を立てて、とりあえず歩き出す。

誰かが気付いてくれるならいいけど、自分でもここに至るまでの状況が分からないのだ。そんなことはまずあり得ない

しかし、歩いて十分。真人は気付いた

「も、戻ってる？ いやいや、まっすぐ歩いたのにそれはない」

先ほど確認したものと瓜二つな切り株に、カッターで印を付けてもう一度歩きだし

十分後

「なんでえーっ！！！？」

絶叫した。

直後、後ろからガサリという音が聞こえて姿勢を低くした。

「見知らぬ場所で大声上げるのはバカだったかな」集中を解かず、少しずつ後ろへさがる。

自分にとって有利な環境が分からないなら、観察が正しい選択はずだから。

「なるべくこっちこないで欲しいけどなあ……」

もう一度音がなった方を向くと、今度はなりやまない。

「あーもうっ！ てやっ！」

全力で石を投げつけた。

投げつけたのだが、そのままの勢いで帰ってきて思わずうずくまった。

「ああああっ！！」

ついでに、剣を降りかぶった女性が見えて、

アキラのいしきは彼方に飛び去ってしまった。

01・1111はギョウマ？（後書き）

ふらりと思いつきました。

頑張りますだ

02・知識の移植

「忘れてたあつ！ 別の星だとか、言葉を使わないタイプだったりしたらっ!？」

気絶から目覚め、開口一番の叫び。

アキラは案外寝起きがいいらしい。

「どうやら、その心配はなさそうじゃな。こうして会話をしている訳じゃし」

少し年老いてはいるが、まだかすれてはいない柔らかい優しい声。

しかし、そんな落ち着けそうな言葉を聞いて、アキラはますます混乱した。

「え？ なんで？ どうして分かるんでしょうか？」

明らかに日本語ではなさそうで、人生において一度も聞いたことがない音の意味が理解できる。

声の方を向けば、寝ているベッドのそばに銀色の髪に緑の瞳。

穏やかな顔の初老の外人がアキラを見てほほえんでいた。

「言葉のことかい？ 孫の粗相を詫びるつもりで、我々の言葉を刷り込んでおいたよ。なにしろ、この村は人語を話す者が少ないからの。

ただ、僕は人語も解るが、君の言葉は聞いたことがない。用心してよかったわい」

「は、はあ……」

ここまでくると、ドッキリではないだろうか。指折り数え、知り合
いはば全員が関わっているような気がして気が滅入る。

あり得ないとは思いつつも、彼らなら何となくできそうなメンツで
ある。

なるようになれと、アキラは頭を振った。

「そうじゃの。どうやら、儂等のどちらも情報が足りなすぎるよう
じゃ。」

孫が帰る前に、すり合わせるとしようかの「

声に出てたかなと首傾げながら、自分の考えをまとめる。

「えっと、なにから話せばいいかな？」

アキラが声に出したのはそれだけだった。

「なるほどのお。そう言うことなら、この世界にいる魔法使いのど
れかが引っ張ってきたという可能性が高いかの「

今度は確実に口を開いてはいない。

「ああ、言い忘れとったが、君の意識を読めるように魔法をかけて
おいたのじゃ。」

見たことのない服装じゃったから、知らない場所からきたのかも
思ったのじゃが、案の定だったわ「

異世界、決定。

「い、いや。ドッキリなのかも……」

どうしても、その可能性は消せないらしい。

プラカードの登場を今や今やと待ちかまえているアキラ。

「残念じゃが、それはなさそうじゃ。それほど面白い人間に、知り合いはいないからの」

その言葉を聞いて、アキラは逆に安心した。

「OK、オーケー。すべて把握できました。口は災いの元とはよく言ったものだねえ。今なら、俺が勇者だとか言われても問題なく認められるよ」

一人でぶつぶつと呟いていると、老人が様々なものを部屋に運んでくる。

魔法陣らしき文字で作られた円を描く絨毯。燭台。鏡。

「異世界かー…」

「そこまで理解するのならば、後は受け入れ、前に進みなさい。最低限は確保して上げよう」

敷いた絨毯の魔法陣に置かれたイスにアキラを座らせると、手慣れた様子で準備を始める。

「寝ている間ならば、まだ楽だったのじゃが。では、名前を教えてくださいもらえるかな？ ……いや、もしかすると、無礼に当たることかもしれないの。私の名前はコーディじゃ。よろしくの」

物腰も柔らかい老人の姿を見ていると、必要以上に気を使われている気がしてならなかった。

「もし、気を使っているのなら気にしないでください。僕は助けてもらっている身です。故郷には仏の顔も三度までと言う言葉があり

ます。三度までなら許してあげるんですよ」

「なるほど、言葉も捉えようと云うわけじゃな」

冗談ですけどと考えながら云うことで、コーデイも微笑んでいる。成功したようで、すこし嬉しかった。

「適応力も知性も高いようじゃ」

アキラに向かって笑いかけると、これから行う魔法を説明しだした。簡潔に言うなら、知識の移植。

コーデイさんの知識を移すらしい。だれに？ もちろんアキラにだ。なぜだか嫌な予感しかないアキラは、頭を振って目を覚ました。

「寝ている間に、我らの中で話す言葉は移しておいたからの。じゃから、私になにを言っておるか理解できたんじゃ。口が利けんかもと思い、頭の中を読む魔法もかけておいたのじゃ」

申し訳なさそうに頭を下げるコーデイ

「もし、僕も普通に話せるようになるんですしたら、その魔法はカットの方向で」

「もちろんそのつもりじゃよ。それじゃあ、目を瞑ってなにも考えないように」

「分かりました」

黙想のように背筋を伸ばして目を閉じる。

それを見たコーデイは頷いて腕をふりかぶる。

アキラはイスから崩れ落ちた。

「悪いのう。起きているとどうしても時間がかかってしまう」

杖になにも着いていないことを確認すると、すぐさま移植を始める
のだった

02・知識の移植（後書き）

書ける内に書いておこうという作戦を発動した

03・世界の常識 真人の非常識

「待てっ！ やめるんだ、チヨビチヨリー又三世！！……………はあっ！？ 夢か」

自分でも、いつたいどんな夢を見ていたのか分からない。分からないが、壮大なスペクタクルの中で目覚めた気がした。

「元気に目が覚めるのはいいことだと思うが、できればこちらの言葉で話してもらいたいのう」

起きるといつもそばにいるこの老人は、寝込みに何かしてきている気がしてならない。

そこまで考えて、それも読まれているということ思い出した。

「ちなみに、言われた通り思考を読む魔法ははずしておいたでの。わしにもなにを考えているか分からんから、できるだけ早くこちらの言葉で話しをしてほしいかの」
何というか、歌うような話し方である。

この話し方を真似すればいいのだろうか。

日本語で書くなら

「うおん」

という何とも言えない音。

「人生初のエルフ語が古式か。わしの記憶は古いからの。もう少し新しい言葉で頼めるかい？」

「ううおん」

微妙な発音の違い。同じ意味の言葉を出してみる。

その意味は、やっぱり夢じゃないんだ……
どうしても、信じるのは難しいらしい。

「そうじゃな。真実じゃ。この世界は嘘偽り無い真じゃよ」

「分かりませんよ。まあ、根元的な話になっちゃいますけど」
一瞬探したのだが、哲学という言葉は存在しないらしい。

この世界での言葉のすり合わせが大変そうだなとアキラは伸びをした。

「そろそろ教えてください。僕は元の世界に戻ることが出来るんでしょうか？ ついでに、呼び出された理由は？」

「どちらも、わたしには答えられん。エルフは魔法の種族じゃが、知識の種族である人間や、もっと高位の種族に聞くべきじゃ」

「高位の種族？」

何のこつちや分からない。言葉以外の常識も、やっぱり必要らしい。

「簡単に言うなら、種族ごと、個体ごとに能力が異なることを表しておる。エルフは魔法、人間は知識などと言うようにな」

言葉の知識を移植されたただけのアキラにはあまり理解できないことだった。

「エルフの言葉と人の言葉の中に違いが見られないんですが？」

「それは、どちらもわしの中の知識じゃからな」

「生まれたときから上限が決まってるってことですか？」

「アキラ君の世界では違うのかな？」

「はい、そうですね。世界的な認識としてはいません。限界を定めてしまえば、そこで終了するというのが基本的に教わることですね。その割には画一的な勉強しか教えることはありませんけど」

前々から考えていた不満を漏らす。

「とりあえず、この世界に呼び出した人間が森の外にいるはずじゃ。そいつ等には見つからんようにせんとな」

「なんですか？ 呼び出せたんだから、頼めば簡単に還してくれるんじゃない？」

真つ先に呼び出した人間を捜そうと考えていたアキラは、コーディを軽くにらみつけた。

「少し考えれば、呼び出す人間への迷惑に気づくはずじゃろう」

「確かにそうですけど……」

落ち込んだのを見て取ったのか、コーディは立ち上がった。

「まず、腹ごしらえをせんとな。特にアキラ君は昨日の昼からなにも食べてないからの」

タイミングよく鳴るアキラの腹に、二人とも笑い合った
すぐさま、アキラの手をかりて食卓に料理が並べられていく。

「虫……か。それ以外はどこことなく和食に近いかな。コオロギやら蜂の子は食べたことあるし、気にすることないか」

思わず日本語で呟いてしまった真人の言葉が、コーディの耳に届いたらしい。

「ん？ なんと叫びたんじゃない？ もしかして、そちらの世界でも人間は虫を食べないのかの？ それなら、さげないと。この世界でも、虫を食べることに嫌悪感を示す者もおるしな」

どんな世界でも好き嫌いは存在するらしい。
日本人としては少数派の自分が世界の代表でいいのかと、アキラは笑いたくなった。

「いや、食べない人の方が少ないです。僕が住んでいた地域では、山の方では食べてたと思いますし、僕は食べれます」

「そうかい。ならよかった」

「それよりも、この三つ目の皿が気になるのですが？」

取り寄せ皿がきれいに三カ所に並べられている。

「孫のじゃよ。今は狩りの手伝いに行つとる」

「手伝いって言っても、今日は私が一番多く捕ってきたけどね」扉が開くとともに、金髪の美女が入ってくる。

「うわ、綺麗な人だ」

聞かれたら恥ずかしく、あえて日本語で呟く。

「紹介しよう。わしの孫じゃ」

「やあ、君がアキラ君ね？ どうも、出会い頭に石を投げつけられたリーザです」

その言葉から数瞬後、全力で頭を下げている少年と、あわてふためく美女。

ほほえんで見守る初老の男の姿が木造の家の中で繰り広げられていた。

03・世界の常識 真人の非常識（後書き）

批判批評でもいいのでご意見待ってます!!

04・恐怖の実話です（前書き）

八割方筆者の実体験です

04・恐怖の実話です

「あそこであの程度の武装だったから、実は相当強いかもって警戒したのよ」

食事の後の雑談は、彼女のそんな言葉から始まった。

「この森は元来人間を寄せ付けん。高濃度の魔力を帯びており、慣れていなければ方向感覚を失わせるようじゃ。それに、出てくる魔物も比例して強い」

魔物とは、魔力を糧に強くなるものだという説明

「ここは、肉食の最強種に近いものも住んでるわ。最初にあったのが私で、運が良かったくらいなのよ」

ただし、実際の食事は種類によって異なるらしい。当然のように生態系が存在するらしい。

魔物って……

想像で補って鳥肌が立った真人は頭を降った。

確かに運は良かった。異世界に飛ばされ、魔物にも会わない。しかも、こうして聞いたこともないような言語を話すことができるようになるなんて、まさに奇跡に近い。

前提の、異世界に来るというところからまずおかしいが。

「最初は驚いたわ。私をさらいに来るにしても、一人じゃ無理なんて分かりきったことなのに」

突拍子もない話に、真人は首を傾げた

「なんでリーザさんがさらわれるんですか？」

「リーザでいいわよ。ついでに言うと、人間にとって異種族交配は禁忌だから。ほら、目を見て。緑と青でしょ？ 青は人間で緑はエルフ。父親が人間なの」

「すみません。なんか、聞いちゃいけないことじゃなかったんですか？」

「空気が重い。」

「気分を悪くさせてしまった気がして、真人は謝った。」

「あなたも、私と同じ側の人間でしょう？ 異世界から来たなんて、私よりも希少価値は高いことだし。いや、そうか……もしかして！ 悪いことを聞いたのかもしれないという真人の杞憂は、次の言葉で完全に消えた。いや、崩れさった」

「真人。あなた、生け贄にされるために呼び出されたんじゃない？

人間にしては魔力もそこそこ。それだけで十分なのに知力も高いし、今やエルフ言語まで使える。これ以上無い最高級の贄じゃない」
一言一言噛みしめて、真人は頷いた

「え……つと？ あれえ？ ワタクシピンチ？」

「まあ、この世界に来てすぐに言葉がしゃべれるとは考えて無いじやろう。人間の言葉で会話をしてごまかせば、なんとかなるじやろうって」

とりあえず、アウトだ。

どうあがいても、逃げられる気がしない。自分の運の悪さではまず見つかることが確実である。

「僕の話聞いて、それからゆっくり考えてください。これからの対処法」

そして語りだしたのは、この世界に来る前の真人の日常だった

その思い出の始まりは、辛うじて記憶の残っている四歳から始まる。近所の川で鯉に餌をやっていたときのことだ。

「容易に想像がつかますよね？ 近くを走っていた人が転けてぶつ

かり、川にダイブ。鯉に体中吸い付かれました」

それが、僕の覚えてる最初の記憶です。

「あ、まだ序の口ですよ」

次は八歳の頃でしたかねえ？

そこまで言つて、真人は困った。地震という言葉が、エルフ語には存在しない。

仕方なく、人間の言葉で地震を知っているか聞いてみた。

「地精のいたずらでしょ？　ただ、エルフの住む土地ではそう言うことはしないと約束しているらしいわ」

ゴードイの孫だから当然かもしれないが、リーザも人間の言葉を理解しているらしい。

安心して、また話を始めることにした。

小さな塀の裏に帽子が飛んで、捕ろうとよじ登ったときに地震。

滑って落ちた。塀に服が引っかかって、手が出せずに顔面から一直線。

十二歳。板をしいて坂を滑っていたら、途中で割けて、膝だけが地面にすれる。

「やけどの痕はいまでも、ほら。残ってるでしょ？」

ほかにも

犬に追われて、登った木は漆でした。

「あ、最近では、仲の良い友達が女性に好かれる体質で、マネージヤーみたいな感じになってました。こればかりは、全力で回避の努力をしてました」

あとは、この世界に無理矢理連れてこられたことくらいですかね。

「救いがある運の悪いことなんて、今回が初めてじゃないでしょうか。………掻い摘んで話したので、鳥の糞が頭に落ちるとか、犬の糞を踏むとか、傘を倒した先は下呂の水たまりとかは、割愛します」

にこりと微笑んで締めくくった。

「いくつか武器を見繕ってくるわ。あと、相手方がなにをしてくるか考えてくる」

「まず、簡単な魔法を何種類か教えようかのう。……いや、それよりも」

思い思いに立ち上がり、部屋を出ていく。

残った真人は、教えてもらった小川に行き、食器を洗うのだった。

04・恐怖の実話です（後書き）

鳥の糞は頭じゃなくて靴に。

滑ったのは坂じゃなくてローラー滑り台。

ギャルゲ体質の奴は、自分で対処してました。（いることは否定しない）

あとは実話。やけどは右膝に残ってます。

05・異世界人の一週間(前書き)

少しだけ、今までより長いです

05・異世界人の一週間

こうして、世界最強の人間。伊藤真人が誕生したのであるー
彼の者、腕を振るい、強靱な風を起こしたもつ。

彼の者、吐息を吹雪に、灼熱にしたもつ。

彼の者、体は鋼鉄ほども固く、岩をも砕く腕力である

「なにぶつぶつ言ってるの？ 早くしないと晩ご飯が逃げちゃうわよ〜」

不意に声をかけられて、最後がおかしくなってしまった。

後ろを振り返ると、五分ほど前に分かれたばかりのはずだったエルフ木にもたれ掛かっている。

リーザはすでにウサギみたいな生物を手に使っていた。

どう考えても早すぎる。

「わ〜っ！？ 何でもないです……ってもういねえ！ ちょっと行ってきます。やっぱり、あいつ狩らないと今日も……？」

少々頭がおかしいと思われたかもしれないが、あれだけ改造されたのだ。

それだけ強くなっただけでも罰は当たらないんじゃないかと真人は思った。

「ええ、あなただけ主菜はないわね。がんばりなさい」

伝説の魔神のモデルとなった人物がひらひらと手を振る。

あの目は本気だ。

もう、何も言わずに真人は木々を伝って飛び去っていくしかなかった。

あれから一週間。彼はこの世界での生活を叩き込まれていた。

人間社会における礼儀、エルフ社会における礼儀はもちろん、魔法の知識と使い方、その隠蔽法。

様々な魔物とその特徴、対処法。

基本的な武器の扱い方と状況に応じて選ぶ方法。

……その他諸々。

「魔法でまるまる知識を移植されて正常なんて、そっちの方が異常な気がするんだけどなあ」

飛び去っていく真人の姿を見つめるリーザはそうやってため息を付いた。

無知とは、恐ろしい

分かる通り、知識だけならその日の内に手に入れていた。ゴージェイの知識をほぼ丸ごと移植したのである。

次の日は一日中ひどい頭痛で動けなかった。足の指でさえ、ミリ単位で動かすと頭に響いたのだ。

ゴージェイも同じ状態。

ある程度予想は付いてたらしく、

「やはり、少しづつにしておけば……」
などと呟く。

我慢できずに全力でつつこんだ真人は、気絶して次の朝を迎えることとなったが。

それから先は、知識の定着とそれを使うための体づくりから始まった。

ゴージェイからは魔法、エルフの礼儀。ほかの村人にも協力してもらった。

悪い人間の魔法に捕まった可哀想な異世界人。

……協力は惜しまれなかった。

相当凹んだ

リーザからは人間社会の礼儀と、狩りの方法。

村の若い人たちに重宝された。

聞くと、ゴージェイさんの知識はかなり豊富らしく、彼らが知らない狩りの方法があつたらしい。

毎日、森で迷子になったが、昨日、突然に精霊の言葉を理解できるようになり、迷子にならなくなった。

言葉と言えば聞こえは良いが、実質は精霊の意識から有用なものをすくい取るだけ。

たずねれば、答えが返ってくる。頼めば答えてくれるが、個々の意志が弱い精霊はきちんとした答えではなく、解読が必要だったのだ。大した根拠もなく、今はなんとなくで読みとっているが。

武器の練習は二人がかり。これは、正直死ぬかと真人は本気で考えていた。

強制的に魔法で回復させられても、精神力はすり減る。しかも、その魔法すら自分でかけるもんだから、体力魔力精神力の三点セットで爆発的に減っていった。

「何にもできない一般人って言うてたわね。それにしちゃ、素手と剣の時は構えがさまになってたし。弓もなんとか飛ぶようにはなっ
た」

空手と、授業中の柔道。見よう見まねの剣道と、弓道

この時ほど、日本人でよかったと思ったことはなかった。

祖父の家が山奥にあり、現代っ子にしては森にも慣れていただけも助けになった。虫を食べるのにも抵抗はなかったし、何より森での体の動かし方を知っていたのだ。

「や、やりました。先生……。早く家に帰りましょう。血抜きもしちゃいましたし」

偶然の奇跡だと考えていた真人の思考など分かるはずもなく、リーザは後ろに来ていた人間に頭を振った。きれいに、首の皮が切れている。血抜きはその場で、そしてそこからすぐに離れると教えてくれたのは確かに祖父であったなと思いだした。

人間なのに森に迷わず、精霊の言葉を読む。

子供程度ではあるが、エルフ並の狩りをしている。

「化け物ね。種族の壁を越えちゃって」

「いやいや、あれだけの改造されれば、誰でもこうなります。しかも、俺が化け物ならゴードイさんはそれ以上の怪物です」

知識として理解している。知っていること以上にできないことの方が多いと。

「あれは、別格よ。エルフなのに最上位の会議に呼ばれたこともあるんだから」

「最上位って、エルフや人間よりも基礎能力が高い人たちでしたっけ？ 天使とか、龍とか……？」

リーザは頷いた。

「まあ暇つぶしはそろそろ良いわね。次は私も手伝うわよ」
その時間は、一分もなかった。

ガサリという音が、先ほど血抜きをしていた場所から聞こえてくる。「今日は、あいつを村のみんなに届けるから。頑張って倒しなさい」

完全に、後方支援の位置に立って真人を奮い立たせた。

「死んだら、恨むくらいじゃ済みませんからね？ ……はあ」
音から察するに、なかなか大きい気がする。
鹿みたいなの、たしか名前はデアルとか言う生き物だろうか。あれなら、みんなに分けても申し分ない大きさだ。

真人は、矢尻に糸切りという風の魔法をかけた。

風の攻撃魔法はこれが基礎。風の塊をぶつけるのは、エルフにとって考えたこともないらしい。

エルフでない真人は、風の魔法はこれを覚えるので今日まで費やした。

塊は確かに簡単で、自主練で身に付けることができた。糸切りに比べれば、難しさは天と地ほどの差があるので、糸切りさえできれば自動的にできるようだった。

当然だ。

最初は真人も思っていた。

ひらひら漂う糸を切るなんて、当てられる分けない。昨日の夜には、なぜ今までできなかつたか不思議なくらいだったが。

魔法は自転車だ。一度できれば、感覚でできるようになる。

考察がいけなかった。

「クマーンツ!？」

全長三メートル

誰が名付けたか、プウサン

この森での最強種

風魔法の熊だった

05・異世界人の一週間（後書き）

一日で一話を目標にやっています

どうしても推敲の時間は短くなりますが、極力直していききたいので色々とご意見待っています

06 ウォーキングデイクシヨナリーの狩り（前書き）

呪文は、格好いいのが書けないので大嫌いです。

今回は仕方なく書きましたが、極力書かない方針で行きたいです

06・ウォーキングデイクシヨナリーの狩り

「ただ今私、猿です。人間捨てる勢いです」

すさまじい音を立てながら、木から木、枝から枝へと飛び移る。

猿と見間違えても確かにおかしくないだろう。

「逃げたままじゃ、狩りにならないわよ」

「ふざけないでくださいっ！俺が狩られるがわでしょうがっ！？」
うっそうと茂った森を器用に走るリーザに、真人はキレた。

「やばい。これ以上は無理。えっと、たしか古い魔法で……」

頭の中の百科をめぐり、例の呪文を探し出す。これが、無理矢理植え付けた知識の使い方だ。使う回数が増えるほど、滑らかに出てくるらしい。

ちなみに今も、魔法を使っている。筋力のリミットを無理やり外すとかいうもの。元の世界でも

聞いたことがあるような話だったから使ってみた。二、三倍になればいいだろうと思ってみたら、本当にそれくらいになった。

その代り、骨がきしむ。

そろそろ限界。

真人は、必死に方法を思い出していた。体の中にある。魔力とか言う良く分からないものを少しだけ外に押し出して、集中する。

「我が内に眠る、精霊を呼び覚ます

我が側にたゆたう、精霊を沸き立たす」

肉体強化と、全身活性。知覚強化と、思考活性。

全部をひっくるめてかける魔法。複数種の精霊を使うために、高難

度らしい。

一度だけ使ったが、そのときは風が使えなかったからか、肉体強化が弱く、十秒しか持たなかった。本来は、時間単位でできるらしいけど、そんなのエルフだけだ、と真人は考えている。

今は戦闘時間程度なら持つ気がする。

十分くらいだけど

リーザの横に降りて、ウサギモドキを受け取った。名前は確か、モム。

「相手は、風ですよ？ 必要な魔法は、火と土ですよ？ そこまでは分かります。でも、接近戦はさすがに無理です。お助けください」

「分かりました。あなたの指示通りに動きましょう」
本気で喜び、真人は頷いた。

「じゃあ、倒して？ ……ゴメンナサイ、頑張ります」

調子に乗って頼んでみたが、方法がないわけではない。頭の中には、種類とともに対処法もしっかりと存在している。

本来四、五人がかりで罾を張って狩る。という知識もあつたのだが、ダメそうなら逃げればいい。今も、引き離せているわけだし。本当のところ、怖さでいえばリーザのほうがこっわいから。

「口が裂けても言いたくはないな」

呟きつつ、それを聞き返されないようにすぐさま魔法の準備に入る。まずは、保護魔法。

「漂う光、包む温もり

想いを糧に、光衣を纏う」

火と光の加護らしい。
感覚で言うなら、体の周りが光の精でできた膜と、火の精でできた膜で包まれている感じ。

ほんのり暖かく、これから訪れるらしい冬に重宝しそうだ。

火だけでもいいのだろうけど、単品での制御は正直まだ怖いので、光を混ぜてみた。

単品で制御に失敗すれば、しつべ返しもそのまま来る。それから体を守るための、二重膜。

火は、制御が利かないと暴走して発火する。下手すると、無差別爆発。

死因、爆死。どこの大魔王だ

「いけない、いけない。邪心にとらわれた。次は、リーザ。剣出して」

何も言わず、走って逃げながらも剣を取り出した。

「熱鎖よ、暴虐に、苦痛を

我らを拒む壁、その抱擁で」

剣が少しだけ重くなるけど、リーザなら平気だと思う。

この世界に来た瞬間の初期装備。石ころを剣に添えて魔力を流した吸い込まれるように石は消えていく。

「これで、炎の剣になりました。切ったら燃えます。あと、魔力を強めに込めれば、鞭にも。コントロールはリーザ、頼んだ」

記憶をそのまま説明した。リーザも知らない魔法らしい。驚いた顔でこちらを見ている。

「劣化版コーデイさん。知識だけなら、ねえ？」

ちなみに、これまでの魔法は、精霊に力を……リミッター解除以外は精霊に力を借りているので魔力消費はだいぶ抑えられている。この森を出れば精霊が減り、威力が弱まるか、魔力を費やして精霊を呼ばなければならぬので不利らしいけど。真人は感心しながら、自分の記憶をよみがえらせる。

「最後は自分で仕留めなさいっ!!」

本当にいつの間にか、すぐ後ろまでプウサンは近づいていた。怖い。怖すぎる。

何が怖いって、あのよだれっ!!

完全に混乱しつつ、真人はさすがのように叫ぶ。

「先生、お願いしますっ!」

「あなたも、何とかしなさいよ。後ろには行かさないから突如ブレイキをかけて、プウサンに向かって降りかぶる。」

何とも心強い。

「うん、どっちの魔法も上手くいつてるな」

プウサンの使う風魔法は、塊を叩きつけるか、爪の先から同等の風で切り裂くことだけ。火の加護は、熱をこめて気流を作り、風を消す。

少しの間なら、ほおっておいても大丈夫。自分より圧倒的に強いリザだが、少しは心配になる。

真人は目をつむり、座り込んだ。

辞書をめくりまくった。

ゆっくり一分ほど考え込み、目を開く。

開いた瞬間、脳を活性化させたのは正解だったと真人は感じていた。リーザの横顔には十分離れたここからでも汗が見えるほどに輝いている。

風のくまさん、侮りがたし。

「声掛けたら下がってえ」

「あと、十分はいけるわよ、っと！」

その状態で十分持つんですか。人間じゃ……いや、エルフか。

無理だと感じたなら、自分で全体強化の魔法でも使うだろう。つまり、本気を出せばまだまだいけるといいうわけだ。

「俺、一分も持たない気がするけど」

「早くしなさいっ！」

「アイ、ママ！」思わず英語が口に出たが、この際気にする必要もない。

「砂塵、裂破、こくとく蠱毒、そして解放。……どいてっ！！」

今までで、一番短い呪文。呪文は、精霊に条件を付けるためのものだから、今回の願いは確かに単純だった。だけど、持っていていかれた魔力はけた違い。

風がざわめいたことに気づいたらしい。叫ぶ前にこちらへと戻ってきていた。

「つつはあ……、はあ、はあっ、これの、どこがつ、大抵の風系の魔物に有効な、はあ、ふう、中級魔法だったの。意識飛ぶかと思つたあ」

その場にへたり込んだ。

そこらへんの風の精をプウサンの周りに固め、一定距離から出れないようにする。プウサン自体も風の魔法を使うので、すごい勢いで風の精は集まってきて満たされる。

あとは、それを開放させるだけだ。場所は、プウサンの首。

呼吸が落ち着いた真人が膝に手をつけて顔をあげると、血を流しながら、この森の最強種がぶっ倒れていた。

06・ウォーキングディクシヨナリーの狩り（後書き）

もし、これぞ格好いい呪文だあつ!!!

とかありましたら、お教えください。

呪文が、使う魔法の用途が合っていたならば即採用します

07・出発前日と、物忘れの法則（前書き）

最初に設定したペースが速すぎました……
そろそろキツいかも

07・出発前日と、物忘れの法則

この森を出るための通過儀礼がプウサンの討伐だったらしい。これで、森の外にはいつでも出ていけるようになったらしい。

「まだ生まれたばかりのような真人君に無理をさせて……」

「大丈夫よ。結果的に風魔法は一人前になったじゃない。生きてればいいのよ」

「まあ、過ぎたことを言っても仕方ないかのお」

「一つ、言わせてもらっても良いでしょうか？」

普段は、二人を見下ろす位置関係の真人が、彼らのすぐ下から声をかけた。

「本人の前で、生きていればあとはどうでも良いとかいう発言は精神的によくありませんからっ！」

ふつつつとこみ上げてくる怒りをぶちまけると、毛布にくるまってしまった。

魔力とは、精神力。時間が経てば少しずつ回復するし、一晚寝れば元通りとなる。

完全に魔力を使い果たした真人は、意気揚々と村へ帰った。

魔力をゼロまで使いきった翌日は、実にすがすがしい朝を迎えられるのだ。

魔力のバカデカイエルフには分からない、真人だけの楽しみだった。

帰って肉を分配。晩御飯を食べて就寝。コーデイに多少文句を言われたが、そんなこと寝る前には忘れていた。

だから、予想外だったのである。

「くそう……魔力は気持ちいいほど満ちてるのに、ベッドから降りれないなんて……」

足の小指から眉間のしわまで、全身筋肉痛である。

「恐らく、脳の解放が原因じゃろうなあ」

漫画にもよくある、反動という奴を真人は初めて体感していた。

「これで、晴れて森を出ることができるようになったわけだけど」「なにを持って晴れ晴れしいのか、詳しく聞かせていただけますか？」

寝たきりの状態を晴れてと言うリーザに少し文句を言う真人。
すでに恒例に近い感じははずなのだが、今日は違った

「明日、君には出ていってもらいたいよ。私が外まで護衛してあげるから」

「ちよっ……ぐうっ」

驚いて起きあがろうとして、筋肉痛だと言うことを忘れていた。

「プウサンを一人で狩ることが、この森を出る条件じゃ」

「それは、昨日聞きました。でも、昨日はリーザに手伝ってもらって……」

「それは、エルフの取り決めた条件じゃ」

コーデイに言わせるとこうらしい。

真人は、エルフとして生きるにしても必要以上の知識を持っている。

ここではエルフとしての知識しか定着できないため、なるべく早く町に出た方がいいとのこと。

さらに言うと、エルフが使う魔法の知識は喉から手が出るほど欲しいもの。

これ以上エルフの魔法は使えるようにならない方がいいらしい。

「原理を知っていれば、エルフの言葉なぞ使わなくても、できるじやろう?」

「ごまかせつてことですか?」

「そうじゃ。そして、ごまかし方を学ぶには、まだ魔法の使えない今の内にここを離れる方がいい。皆も慕ってくれておるが、君の目的はここでは叶わんしの」

優しげに微笑むコーデイに、真人は

「はぁ……」というのが精一倍だった。

「そーか、ここ。異世界だったわ」

この世界にきてまだ一週間。

生きるギリギリを何度も味わってきたせいだろうか。

戻るやら何やら、そんなこと頭の隅にもなかった真人が思い出すのは、
昼を過ぎ、

やっと一人で立てるようになった頃であった。

07・出発前日と、物忘れの法則（後書き）

最初にああは言いましたけど、まだまだがんばります

08・人間ボウリング

「はあ……。なんで、何で一人旅なんだよお。ゲームとかの定番だったら、リーザとかついてくるじゃんかあ」

心ここに在らず。この森の住人たちが好んで着る革製の服に身を纏う。素材は昨日の食材の余り。

村でさばいた後、村の女性全員で、なめしたりなんだりして作ってくれたらしい。

みんなが作ってくれた。と言うあたり、それを報告してくれたリーザは関わっていないのだろうか。

ともかく、風のくまさんの皮だけあって、風魔法には強いらしい。

頭の辞書によると、この森の付近は風の魔物が多いらしく、ありがたい。

「一人旅に、早くも挫折寸前。だいたいさあ、村の居心地が良すぎるから、あそこで一生暮らしても良いぐらいだよ」

及第点を出してくれるまで、一生懸命世話をしてくれ、また来いよと送り出してくれた人たちのことを考えると、このまま居たいとは言いづらかったが。

「とりあえず、ここから先は人間の言葉。魔法も、人間の言葉か精霊に頼む。一般庶民と同じ身分で、いつの間にかエピソード記憶喪失。極力人とは会話せずに、一気に町まで行く。食料は現地調達。皆からもらった保存食は使わない」

声に出しながら、注意事項を確認していく。

すでに、木に隠れて見えなかった太陽は真上にある。
季節はまもなく冬。

この地域は雪も降るらしいから、夜は冷えるだろう。

できることなら、一日だけでも村に泊めてもらいたい。金がない。
完全に文無しなので、移動しながら就ける職を探さなければなら
ない。

町ごとの紹介所で探すしかないだろう。

文字や言葉が分からなければ、その時点でくじけていた。

金田一さんはペンと紙でアイヌ語を理解したと言っけど、きっとそ
れは帰る場所があったからできたんだ。

この世界に来たときは、その方法に希望を持っていた真人は自分の
ことを柵に上げた。

「あ、梨っぱい味のする実！」

一人暮らしの初めはは独り言が多くなると言うが、それ以上の口数
で真人は歩いていた。

「まっもなつく出口い！……………のはずだよな？」

首を傾げて精霊にたずねる。

「助けてっ！」

帰ってきたのは明らかに別の声。

いや、ここらの精霊は空気の振動を媒体として意志を伝えないので、

精霊ではない。

慌てて、声めがけて走り出した。

聞こえたのは、若い女の声。

「RPGっぽいっ！」

と喜びながら、リーザにもらった剣に、魔法をかける。

基本的に予防策を忘れない性格で助かった。

「つがいのプウサン!？」

思わず大声を上げてバレてしまった。

襲われているのは、どこからどう見ても普通の、真人と同年くらいの女の子。

「助けてくださいっ！」

人間の言葉で求められた助けを無視するわけにもいかないが、

「よだれこわっ！」

肉食獣です感が溢れ出ている。

「……とりあえず、逃げるっ!!！」

全身強化に強制解除。風の精に後押ししてもらい、土の精に力の手助けをもらう。

昨日は避けた単一の精霊での制御で炎の鞭を振り回す。

対象以外は燃やさない条件で作り、火事にならないように気をつける。

「何でここで冷静なんだあ!？」

肉体的にも魔法的にも限界まで稼働させている中、頭の中だけは冷

静な自分に驚く。

「す、すごいですね。相手は魔獣なのに、少しづつ引き離してます」「それより、なんで……っ。こんなところ、あいてっ……こんな所にいたんですか」

感じたことのないスピードで走る真人に、容赦なく枝葉は飛びかかる。

後ろに背負った女の子にぶつけるわけにもいかず、地味に痛い攻撃を受け続けた。

「探しているものがあってですね……今はそんなこと言ってる場合じゃありませんけど」

ありがちなのは、病気の親へと薬を作るための材料。

真人が今まで読んだ本には、そういうものが多かったからだ。

余計な思考が頭を使わせてしまい、一気に無駄な疲れを感じていた。「私も魔法を使えるんです！」

「なるべく、この場で有効なのを頼む。森の外までひとつ飛びするやつとか」

辞書を開いてみると、確かにそんな魔法も存在している。

あらかじめ、大がかりな準備をしていなければ使用することができないものなので、希望的観測以前の問題だと真人は思っていたのだが、

「……………あっ」

「なにっ!? 今の……………あっ。ってなにっ!! あるの? あらんでしょ? あるなら早く使ってくれえっ!!」

「わ、わっ! はいっ! 分かりましたっ!!」

慌てて、その呪文を唱え始める。

呪文からして、真人が知っている魔法らしい。確か、かなり大がかりな魔法だ。

術の使用者以外に四十名の術者が必要。

転移術ではあるが移動先の安定を保つために、四方から十人一組で魔法、物理の両面で固定させる必要がある。

並び方は一列目から、1、2、3、4人で三角を作るように隊列を作る。

ちなみに、飛んできたものは全く同じ状態で転移される

そこまでで、気付いた。

「ま、待って！」

時すでに遅し。

飛んだ先に待っていたボウリングピンに減速する暇もなく突入する。

力押しのボールは10ピンすべてを勢いよく弾き飛ばし、華麗なるストライクを叩き出して二つに分かれていった

「……どこかに飛ばされると、必ず気絶する………」

彼の、極限まで活性化した感覚はその一瞬を完全にとらえていた。

飛んでくると、数十センチ目の前に見える目を瞑った魔術師の顔。なかなかきれいな顔立ちをした男で、体を動かすのは苦手そうだなと真人は思った。

そんな男へと突撃する自分。背中から行けば、そこまで痛みを感じることもないだろう。

しかし、女の子を背負っているため手で頭をかばうだけに止めにした。

そのまま、少しだけ体を沈めて骨のある辺りにぶつかるのを避ける。

真人は頭を腕で隠しているので分からない。

人間の部位で、骨のない所など一つしかない。

二人に気付いた男は顔色を変え始める。

勢いは余すところ無く男の腹に衝撃として伝わった。

口から何かを吐き出し、両腕はラリアットのよう後ろ二人の首へ叩き込まれる。

横に広がるように飛ばされていく二列目右の人。足が後ろの人の腹へぶつかり、同じように衝撃に吹き飛ばされる。

そして、三列四列。

放射状に散らばった魔術師の塊は、最前列の一人以外なにが起こったのか理解できずに意識を落としていった。

09・極刑と召喚（前書き）

もし、このようになつまらない小説を楽しみにしているかたがいたなら、申し訳ありません。

昨日は吐くほどに具合が悪くて、投稿できませんでした。

どこかで埋め合わせします。

09・極刑と召喚

朝起きて、目が覚めて、僕はぼんやり考えた

両手は縛り付けられてるけど、えーと僕は、誰だっけ、誰だっけ？

「とりあえず、川へ向かわなきゃいけないので失礼します」

「なにを言っている？ チシル、お前はこれと会話したのだろう？

この言語を使ったのか？ いや、それ以前に言語とも思えん」

寝起きで働かない頭。そして、鈍い痛みのする腹。

さっきは、動こうとしたのに動けなかった。

「聞き覚えのある言葉」

どうやら、寝ぼけてこの世界に来たということ忘れていたらしい。

「なぜだか、おなか痛くて。意味不明なことを口走っていたみたいです」

言って、少しだけ目を開いた。目の前に広がるのは木製の柵。首が回せなくて後ろは向けないが、たぶん張り付けにされているんだろう。

「ったく。張り付けにして、さらに檻にまで入れるか。どう考えてもバレてるねえ……………」

異世界から来たとバレていない可能性もある。人間の文化は聞いていたから、分かる。

これと呼ばれるのは人として見なししていない場合。

真人は誰にも気付かれないほど小さな声で、火と呟いた。

精霊に呼びかけるのは簡単らしい。

思っただけでいいのだから。

思いが強ければ強いほど、寄ってくる精の質、量ともによく、高くなる。

だから、それを連想させる言葉を呟けばいい。

五感以外の何かで、火の精霊が集まってきたことを何となく感じる。

「確かに、人の形をしている分、知能は高いようだな。人間の言葉を解する召喚など初めて見たわ。だが、見て感じる魔の力が圧倒的に弱い。我々より弱いものを呼び出しても意味はないな。所詮は持たざるものだったか」

助けた女の子は、なにやら悔しそうに歯噛みしている。

今にも泣き出しそうだ。

「あの、いったいどうして私はこのように縛られているのでしょうか？」

「口を利くな外道」

外道とはヒドい。どう考えても、この捕まえ方の方がヒドいだろうに。

真人は、だんだん腹が立ってきた。

「現れた途端、私のような高貴な人間に突撃なぞしおって」

その言葉に、思いつきり真人は顔を上げた。

プウサン二頭から逃げた後遺症で、筋肉痛らしい。

全身がしびれてすぐ頭を垂らしたが、確かに見た。

覚醒した脳が捉えていたスローモーションの中で、一番おもしろい

動きだった先頭の人物。

「申し訳ございません」必死に笑いをこらえながら、うわずる声で謝った。

「謝らなくてもいい。どうせ極刑だ。呼び出したチシル共々な」

極刑。頭の中の辞書を引くと、こんなことが書いてあった。

――確立した意味というわけではないが、公に広まっている意味では奴隷もしくは死刑

また、狭い社会の中では魔力を搾り取って生け贄にすること。生け贄の意識は召喚されたものに留まるようになっていたため、死の苦痛を抱えたまま、もう一度生を受ける――

「へえ……死んだ人間がどうなるか分かってるんだ。面白い」

『面白がつてる場合じゃないです！ 全部の説明は後でしますから、よく聞いてください。今から檻を壊します。さっきのように、走って逃げてください』

急に頭へと話しかけられたが、それはすでにコーデイに聞いていたので真人は驚かない。

召喚したものとされたものは、頭の中で会話できるらしい。

それを使って、自分が召喚したものを認識するためらしいが。

『えっと、それ無理。無理したから、ほとんど動かない。それよりも、檻と背中についてるやつは俺が壊すから、その後どうにかして』
召喚者がオンの状態にしていれば、頭の中が常に交信状態になるら

しい

「準備を。小物でも、絞り出せばそれなりの魔力になるだろう。今から始めて町へ戻りながら実行する」

どうやら時間はないらしく、チシルは本気で慌てている。

真人にも伝わってくる感情には、恐怖と憎悪が入り混ざっていた。

『で、出来た？ こいつらが、俺を檻から出したところが勝負だから。森の中に逃げ込めれば勝ちだから』

『たぶん、できるとおもいます。あなたを背負ったら、五分ですけど』

『牽制はするから大丈夫だろ』

ふざけている。どこかふざけている。

ありに現実味のないこの出来事が、真人の思考をよりクリアにさせた。

「あんたらってさ、自分の力しか信じてないよね。ちっばけな自分が最強だって思いこんでる。その魔力だって下から数えた方が早いんじゃないか？」

自分をあざける人間がバカでなければ、これからの作戦はこの言葉にかかっていた。

「早くしろっ！！ こいつは殺されたいらしいっ！」

キレて、部下たちに命令をする。

『群れる人間は、一番上が崩れれば、あとは楽だ。逃げる準備、頼

んだぞ』

久しぶり、いや、この世界に来る前もあまり見ることでできなかった広い空は、日本の秋のように、高く澄み渡っていた真人にも伝わってくる感情には、恐怖と憎悪が入り混ざっていた。

『で、出来た？ こいつらが、俺を檻から出したところが勝負だから。森の中に逃げ込めれば勝ちだから』

『たぶん、できるとおもいます。あなたを背負ったら、五分ですけど』

『牽制はするから大丈夫だろ』

ふざけている。どこかふざけている。

あまりに現実味のないこの出来事が、真人の思考をよりクリアにさせた。

「あんたらってさ、自分の力しか信じてないよね。ちっぽけな自分が最強だって思いこんでる。その魔力だって下から数えた方が早いんじゃないか？」

自分をあざける人間がバカでなければ、これからの作戦はこの言葉にかかっていた。

「早くしろっ！！ こいつは殺されたいらしいっ！！」

キレて、部下たちに命令をする。『群れる人間は、一番上が崩れれば、あとは楽だ。逃げる準備、頼んだぞ』

久しぶり、いや、この世界に来る前もあまり見ることでできなかった

た広い空は、日本の秋のように、高く澄み渡っている

真人は、大きくため息をついた

09・極刑と召喚（後書き）

ボーツとしながら書いていたので、今日分もヒドいかも……

10・逃げ方にも美学がある

「弾けなさいっ！！」

檻から出される瞬間、目の前に怪しい水の玉が現れて、爆発しました。

正直、かなり痛いです。しかも、水ですか。生ぬるい。

火なら、後遺症も残るから追いかけれにくいのに。

「行くわよっ」

「あゝ……リーザさん？　ちよいと、あの子は連れていきたいんですけど？」

この、精霊へお願いするという形を無視した魔法は、彼女以外あり得ない。

精霊は、押しつけられるのが嫌いらしいから。

「許可よ。あなたがここに飛んでくる前と、生け贄にされるって話よりあとは聞いていたから」

「チシル！　ついてこいっ！！」

チシルに手錠をはめようとしていた人間は、水とは違う何かをしたらしい。

かなり離れたところに倒れている。もともと助ける気だったらしく、チシルの手をつかんで走り出した。

「あんたも来なさい。それより、あとはどうにかしなさい！ 私はここまでしか考えてないわよっ」

「本当に、後先考えないんだから。じゃあ、俺が魔法を打つたら全員に、目眩ましお願いします」

「了解。森に逃げ込むわよ？」

言いつつ、両手に一人づつ抱えてすでにリーザは走り出していた。

「ファイア・ボックス！ っと……いや、目を眩ませたなら、町の方へ向かってください。目が見えるようになる前に、視界から消える必要があります。ついでにチシル、自分で走って。振動で、俺の筋肉痛がヒドくなるから」

この一言に、真人は感動していた。

リーザには、万が一一行様に聞かれても分からないようにエルフ語チシルには人の言葉で話しかけていたのだ。

「ああ……、トリリンガル……って言うのかな？」

異世界とは予想していなかったが、これなら自慢できるだろう。誰に？

いや、分からないが。

「町までって、何キロくらい？」

とりあえず、森の周りには村が三つあることは知っている。

どこへ向かうのだろうか、リーザの手を放れたチシルに真人はたずねてみた。

「このペースで一時間ほどです。この丘のちょうど真裏にあります」

「一番栄えている町は？」

「ここから西に一時間くらいですかね？　ちなみに、あの人たちはそっちです」

「物分かりがよくて助かるよ。じゃありーザ、コーデイさんに連絡してくれない？　森に40人ほどお客様が来るって。俺じゃあ、そこまで遠くは無理だから」

「分かったわ。……ねえ、一つ聞いていい？」

走りながら風の精に頼みごとをしている。

気まぐれな彼らを使いに出すことができるのは、せいぜい十メートルが真人の限界なのだが、エルフの限界は分からない。

「ちよつと待つて。宿に待機してるのは何人？」

「……たぶん、数人の召使いです」

その言葉に、満足げに真人はうなづく。

「じゃ、行こっか」

それから、三時間後。ゆつくりと歩いた三人は目的の町に着いていた。

「これで捕まったら、あんたをおとりにして逃げるからね？」

「たぶん大丈夫だって。最低でも日が沈むまで。たぶん今日は戻ってこないから」

バカでなければ、あそこまでプライドが高くて追わないはずはない。森に必ず向かう。そして、そのまま探す可能性の方が高い。

「大荷物だったし。けど、わざわざ大切なものを危険にさらすわけがない。四十人も居たら、宿を取るにもでかい町、宿。さて、俺はなにをしたいでしょう？」

人のものを盗るなんて考えたこともない二人には、分からない。

「命を奪うなら、それ以上の覚悟を持ちましょう。あいつらは死んでも仕方がない。森で死ぬかもしれないしな」

なんとか歩けるようになった真人は、ぎこちない足で目的地を探そうとした。

「二人に聞いていい？ 今から、あの魔法使い集団を敵に回す。嫌なら、この町にいる意味はない。早く逃げた方がいいよ？」

遠回しに言い過ぎたことに気付いた真人は、そう言いなおして、また歩き出す。

「私は、あいつらが嫌い。あの、命令口調の奴がだいつきらい」だから、リーザは好きだなあ。

性格がさばけている彼女を見て、我慢できずにクスリと笑う。

男らしく、女らしい。

着いていくなら、覚悟をしなければ。

「私の居場所は、あそこしかありませんでした。失うものはありません」

決意に満ちた顔をしている。一度言い出したら、聞かないタイプだろう。

こちらも苦勞しそうだ。

「分かった。じゃあ、まず俺の考えを説明しておく」

この世界に来て、まず犯罪に手を染めるとは思わなかった。

自分なりの正当性を持っているとはいえ、ただの犯罪。

「まあ、似たようなことはしてたしな。毒を食らわば皿までだ」

二人を促して、歩きながら話した。

10・逃げ方にも美学がある（後書き）

自分で読み返して分かります。

全話、明らかに説明不足。

黄金週間に修正できるよう、鋭意努力します

11・お情け犯罪

皆さんは知っていますか？ 泥棒と言えば風呂敷包み。

あそこに描かれた唐草模様の発祥は、エジプトともメソポタミアとも言われています。

ラーメン丼の渦巻き模様も発祥は同じらしいです。

真人は、誰とも分からない脳内の人に向かって講義をしていた。

「で、どうして私は行っちゃだめなの？」

それも、どう説明しようか困っていたからである。

「泥棒は顔を覚えられると困るから、布で隠して夜中に動きます」

「うん」

「今日は昼のうちに済ませるので、そんなことをしたら逆に目立つ」

「ええ、そうね」

ここまでではいい。

「有り体に言うなら二人は美人で、この町に来てからちよくちよく見られている。そんな人が他人の部屋に入ればさすがにバレる。商品価値が分からないから、一人だけ連れていくんだ」

文句を言われるのは分かっていたので、手で制しておく。

「チシルは自分で選ぶ必要がある。これからに必要なもの、捨てていくものを」

ここまで言えば、さすがにリーザも分かった。

「宿の裏にいて、俺たちが盗んだものを受け取ってくれ」

「……わかった」

今は、ちょうど夕方。実行するならちょうどいい時間帯だ。

「俺は、旅人を装って宿の主を引きつける。お前がやってくれ」
チシルは小さくうなづく。

「ちなみに、自分のものも、少しは残していけ。制限時間は三十分だからな」

今から、日が落ちる前のこの時間が有効時間。

それ以上はこの町にいればいるだけ不利になる

この会話は宿のすぐ前。百人は泊まれるかもしれないほど大きい宿だった。

「じゃあ、演技開始。良くなったら呼ぶから、それまで頭の中で話すのを切らないで欲しい」

「はい」

「二人とも、いろいろ疑問があると思うけど、この町出るまではスピード第一で行くから」

手を振って、宿へ入っていく。

今まで全く話していなかった二人は気まずい雰囲気になっていた。

「ね、ねえ？」

「はい。なんででしょうか？」

本人にその気はないのだがつづらな瞳で振り向かれると、さらに気まずい感じになるリーザだった。

「おばさん。ちょっといい？ 聞きたいことがあるんだけど」
入るなり、受付に座る人に声をかけた。

「はいはい、なんだい？」

「ここから、どこに行けばいいか分からないんだけど」

「地図はあるかい？」

「あ、仲間に渡して来ちゃったわ……」

「じゃあ、そこに座って待ってな。持ってくるから」

やはり宿、それもこれほど大きくなれば臨機応変な対応が求められる。

おばさんが奥へ入っていったとき、チシルが扉を開けて二階へ上がっていくのが見えた。

「しまったわ……こんなにでかい宿なら、従業員の一人や二人居るよなあ」

進められた席のそばには、掃除をしているかたがいる。

「決めたことは曲げないタイプみたいだからなあ……。なにをやらかすのか」

ドサツという音も聞こえる。

「いやいやいや……何をしやがっているんだ？」

「どうしたんだい？」

「あ、いや、なんでも」

ここから先の予定は、国の首都に出て、魔法の得意な人を捜す。

そこで知識を吸収して、生き方を決めなきゃいけない。

「この町の西門からでて、道のりをずっと。二つ目の町で別の道を行くんだよ。補給なら、この町がおすすめだね。国境にも近いから、いい物がそろってるよ」

そこから話を広げて、行く

ツサツ、ガシユツ……

はあっ！！？

真人はなんとかつつこまずにいれたのだが、そんなわけにはいかない

「何の音だろうね？」

「……さあ、なんででしょう？」

『もう出て行け。そろそろまずい！！』

『分かりました。窓から出ていきますので、もう平気です』

「じゃあ、隣町に明日までに届けなきゃいけない物があるので……」

「大変だねえ。お連れさんにもよろしくね」

立ち上がって頭を下げる。

帰ってきた言葉は、別におかしいものではなかったが、顔を上げた真人のは頭が痛くなった。

主は、指を上に向けている。

「なんと言っても、ここはエルフも使う宿だ。さすがに気付くさ。

ただ私も、あいつらは嫌いだからね。あのお嬢ちゃんはどうして自分の所に盗みに来たんだい？」

完全にバレてしまっている。

「あいつらは、自分たちが出ていくまで部屋似走るなって言ったんだ。中が変わっても私らには分からないさ」

どうやら、初仕事はお情けの成功だったらしい。

お礼を机におき、とぼとぼと宿を出ていった。

「リーザによろしくねえ。あの子、もうすぐいろんなことが起こるから」

もう、ずっとこけるしかなかった

11・お情け犯罪（後書き）

俺だって意味が分からない。

極力早く直します

12 初ホームシック……？（前書き）

まさか、GWが、がんばってworkしてという意味だったとは……

12・初ホームシック……？

「というわけで、こちらの宿、一番の部屋をお貸しいただいたわけですが……」

思いつきり机を叩き、周りが完全に静かになったところを見計らって、真人は切り出した

「誰に、どう突っ込めばいい？　と言うより、何この理不尽さ？」

目の前に広がるのは、完全なる宴会風景。

数人の町人、宿の主も集まっている。

そして、真人以外の人、ここが重要だ。

真人以外の人全員がお酒を酌み交わしていた。

「だからあ、リーザが言っただけか？　あたしは予言者だつて。こうなることなんて、一ヶ月前から分かってたんだよ」

「そーよ。おさんの予言は外れないんだから。私たちが盗みに入ってたって、どーせ捕まるのがオチよ」

「いや、それは違うねえ。この坊やはどんな対策をしても、必ず盗んでいく予定だった。私が見たのは、盗んだあとの光景だけだからねえ。なら、こうするのが一番良いんだよ」

真人に向けての会話が終わると、木製のコップをカチリと鳴らし合った。

「……この国に、飲酒に関する法律は？」

文句を言うように真人はチシルにたずねたが、

「ありません。だいたい、十歳くらいからが一般的な飲み初めでしょうか」

「じゃあいいや。飲もう」

無いことを知ると、全く抵抗無く飲み会に参加していた。

そしてそれから一時間、謎のドンちゃん騒ぎの中、真人は日本語を出さないように気をつけながら盛り上がっていた。

「気持ち悪い……………」

「わ、私もです……………」

「ふざけるなど、調子に乗るなど言いたい」

たった一時間ほどの酌み交わしでこうなってしまったのだ。

ベッドの横には桶のようなものと、屍になったリーザが置かれている。チシルもリーザほどではないが、頭を押さえてうずくまっていた。

真人は下戸ではない。

正確に言つと、両親ともにいくら飲んでもほんのり赤みを帯びるにとすらない。

だから、初めて飲んだとはいえ、真人は安心していた。

さすがに頭はポーツとしてきたが、この世界の人間の言葉しか出さないくらいにはしつかりしていたのだ。

「二人とも、酒は飲んでも飲まれるなつて言うでしょうが」

「……………初めて聞きました」

もちろん、こちらの世界にそんな標語はなさそうだ。

大人たちは、そのまますんなり帰っていったのだから。

でも、

「み、水……」

これを見たらさすがに言いたくもなる。

飲んだ量は、宿のおばちゃんが一番だろう。

本人は、ひょうひょうとして水を運んできているが。

「つまらないねえ。初めてで潰れないなんて。で、ちよつとこつち来なさい。占ってあげるから」「唐突過ぎやしませんか?」

気にするなど、腕を引つ張られてしまった。

「ということなんだけど、もう終わってるのよね。占いみたいなのは」

「先ほども、予言って言ってましたしね」

「よく聞いてたわね」

感心するように真人の目を見る。

「この世界で生きていくためには、情報はあればあるほど良いと思いますんで」

そのままなぜか、一階にあるキッチンまで連れて来られる。

「さて、坊やはそつちで肉の仕込み頼むよ。調味料はこつちの棚だから。ま、占いの料金だと思ってくれればいいよ」

しかたなしに、真人は調味料の味を確かめる。

その指をくわえたまま、固まってしまった。

目を見開き、ワナワナと震え出す

「醤油っばいっ！ おっと！？ コシヨウとニンニクっばいの！」

酔っていることも手伝ったのだろうが、この世界に来て二週間。まさか食べ物で懐かしさを感じるとは思わなかった。

「どうして涙ぐんでるんだい？」

ニンニクを手にしてしゃがみ込んでいる真人の背中に、手が差し伸べられる。

「未練はないと思ってたんですけどねえ。俺、料理好きなんですよ。小さいころからアウトドア好きだったんで、燻製とか」

この世界でアウトドアもなにもないが。

「やっぱり、バーベキューみたいなのでいいのかな？ そういやコーデイさんには、食べれる物の知識はあっても作り方の知識はないや……」

気付いたことにクスリと笑いながら醤油っばいっ味の液体に漬け込み、ニンニクやらなにやらを突っ込む。

「これ、なに肉？ いいや、気にしたら食べなくなりそうだし」
油を探して、手が止まった。

辞書に、ふと引っかかる物があったのだ。

この地域で、油とつながる魔物がいたはずだ。

思い出してはいけないような気がするのだが、思考は言うことを聞かずにページをめくり続ける。

「うっ！ やっぱり……」

人間大のナメクジっぽいもの。見てしまっただけなんだけど、エスカルゴを思い出して踏みとどまった。

「仕込みは終わりました。あとは揉み込んで焼くだけです」
他にも少し手を加えると声をかける。

「じゃ、そこで休んどいてな。私の方ももう終わるから」

こちらの世界でも共通のフライパンを片手に、皿を取りだしていた。

「さて、先ほどの失言はどう誤魔化しますかねえ」

設定的には記憶喪失にしようと考えていたのに、完全に失言である。
アウトドア好き……

自然とでてきた言葉という事にしておこう。

この時はまさか、こんな目的だったとは思っても寄らなかつたわけで

……

12・初ホームシック……？（後書き）

と言うわけで、これからだいが話を直し始めますので、更新ペースは遅れます。

別の話も、少しずつ書き始めるつもりです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6079g/>

凡人凡夫の異世界探訪

2010年10月22日00時14分発行